

ランチオンセミナー 1

アセトアミノフェン  
～最新情報を整理する～  
がん疼痛治療における位置づけ

日時

6月14日(金) 12:20～13:10

会場

第2会場 神戸ポートピアホテル  
「大輪田A」

座長

荒尾 晴恵 先生

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻  
看護実践開発科学講座 教授

演者

余宮 きのみ 先生

埼玉県立がんセンター 緩和ケア科 科長兼診療部長

- 本合同学術大会のランチオンセミナーは事前登録制です。
- 詳細は合同学術大会Webサイトをご確認ください

Abstract

# アセトアミノフェン ～最新情報を整理する～ がん疼痛治療における位置づけ

埼玉県立がんセンター 緩和ケア科 科長兼診療部長

## 余宮 きのみ

最近になり、アセトアミノフェンの有害事象や鎮痛機序について新たな知見が得られている。

2023年、添付文書上の禁忌が「重篤な肝障害のある患者」、「本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者」の2項目を残し削除された。一方で、アセトアミノフェンの過量服用による中毒性の肝障害が広く知られており、使用に際しての懸念事項になりうる。

海外では、治療量のアセトアミノフェンによる肝障害は0.001%と稀な有害事象とされている。日本で1日最大用量4gが認可された際、規制当局からの指示により特定使用成績調査が行われた。ALT値が施設基準値上限の3倍を超えた症例で薬剤との関連が否定できなかったのは1.0%だったものの、Hy's Law基準を満たす症例で関連の否定できなかった症例はなかった。また、アセトアミノフェン3gを4週間投与した試験では、ALT上昇が35%の人に認められたものの、投与開始14日以降には低下する傾向がみられ、またALT値と肝障害のマーカーであるHMGB1との相関は見られなかった。

さらに、アセトアミノフェンの新たな鎮痛機序として、代謝物のAM404が脳内、脊髄のTRPV1受容体を活性化することや、炎症疼痛モデルでも鎮痛効果が認められることが報告されている。

がん疼痛治療におけるメリットとしては、NSAIDsのような有害事象が少ない点、オピオイドや鎮痛補助薬にみられる中枢神経系の副作用がない点が挙げられる。ALT値は、薬剤性肝障害の指標として使用されているが、多くの疑陽性がある点を考慮し、過度に肝機能障害を恐れるのではなく、メリットが活かされる症例ではアセトアミノフェンを試してみたい。